

第11回 フナ



干拓以前を知る人たちから、よく河北潟の鮎はおいしかったという話を聞きます。甘露煮や刺身、みそ汁、ぶつ切りにした鮎をなますにした「そろばん」など、さまざまに料理されていました。金沢では今でも寒鮎の甘露煮を正月に食べる風習がわずかに残っていて、少し前までは近江町市場で河北潟産の鮎を売る店もありました。

現在では、河北潟の鮎は食材というよりは、釣りの対象魚です。河北潟は昔から鮎釣りの人気のスポットだったようですが、かつての食料確保を兼ねた遊び仕事から、純粋なレジャーとしてヘラブナ釣りがおこなわれています。地元の新聞社の主催による釣り大会や愛好家による各種イベントも開かれています。日本へら鮎研究会のメンバーその他による個体数調査など、釣魚としての資源を守るための取り組みもおこなわれています。

この釣りの対象となるヘラブナは、もともと琵琶湖固有種のゲンゴロウブナを改良したもので、植物プランクトンを食べ、成長が早いという特徴があります。現在では河北潟に生息するフナ類のうちでもっとも数の多い種となっていますが、もとは放流されたものです。本来、食用として選別改良したもののようですが、食味は悪く、釣り上げたヘラブナのほとんどは、リリースされます。体高が高く眼が下を向いていて、昔から河北潟の鮎に親しんできた人には、今でも違和感のある容姿のようです。

昔、河北潟に多かったのはギンブナで、釣魚としてはマブナと呼ばれています。雑食性で、ヘラブナが練餌で釣れるのに対して、ミミズやアカムシでも釣ることができます。寒鮎といわれるのは本種で、冬になると岸よりのヨシの根方などに集まって越冬することから、そうした場所にたも網を入れて捕獲する方法や、あらかじめ束ねた粗朶を水中に沈めておいて、寒中に粗朶のなかで休

んでいる鮎をゆっくりと引き上げる「ツケ」と呼ばれる漁法もありました。現在でも河北潟にはギンブナが残っているようですが、大人が普段使わないミミズを餌にした子供たちの釣り大会では、圧倒的に外来種のブルーギルが多く釣れています。ギンブナとブルーギルは餌が競合するため、ギンブナの生息条件は悪化している可能性があります。

河北潟には、このほかにキンブナという種も生息しています。地元では赤鮎と呼ばれる一番おいしい鮎で、たくさん獲れたそうです。ギンブナよりも細い長い体型をしています。本来、潟本体よりも潟の周辺の川や水田の水路などが生息環境です。本種は、今ではほとんど見られなくなってしまいました。圃場の基盤整備や河川の改修により生息環境が少なくなってしまうことが、原因の一端となっていると思われます。（文 高橋 久）